

# かささぎ



北京日本人学校  
学校通信 第3号  
平成28年6月27日  
校長 奥田 修也

## 寄り添い、見出し、伸ばす

北京日本人学校教頭 高橋 勝

年度当初にもらった学級通信の一節を読み、思わず頬がゆるんでしまいました。「学級に日めくりカレンダーをかけておいたのですが、毎日誰かがめくってくれます。たったそれだけのことですが、毎朝うれしいです」。クラスの子どもたちを温かく見守る担任教師の眼差しが浮かんできます。

この一節を読み、教員になったばかりの頃に私淑していた大村はま先生のことを思い出しました。先生の著作の中に、ある勉強会で聞いた話として「仏様の指」のことが書かれています。

——仏様がある時、道端に立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまって、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男のようすを見ていらっしゃいましたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていってしまった。

大村先生は、「こういうのがほんとうの一級の教師なんだ。男はみ仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、ついに引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていったのだ。」と恩師が話されたのを聞き、こんな存在の教師になりたいと思ったそうです。

思えば、私が今の仕事につくことができたのも、小学生の頃お世話になった一人の先生のおかげです。夏休み明け、母親に手伝ってもらって提出した作文が学年で一番の評価をもらい、昼休みに全校放送されました。他の先生方や友達からもずいぶんほめられましたが、あれは自分の力で書いたものではないという思いが強く、穴があったら入りたいと顔を赤くして放送を聞いていたのを思い出します。そんな気持ちを察してくれたのか、後日、国語の時間にがんばって書いた社会科見学の作文を、先生は再び代表に選んでくれました。人知れず傷ついていた小さなプライドが癒えるよう、先生が上手に導いてくださった結果だと思えます。そのことがきっかけになり、いつのまにか自分は文章を書くのが得意のだと思ひ込むようになりました。勘違いがもととはいえ、結果的に国語の教員になることができ、先生も喜んでくれたのではないかと思います。

全国から集まった本校の教員の中には、毎日のように学級通信を出している者もいます。こうした教員との出会いが、子どもたち一人一人の確かな成長につながってくれるよう願っています。



## 親子読書週間を終えて

本の世界に浸っている子どもたちの姿は、本当にさまざまです。目を輝かせている子、じっくり淡々と読んでいる子、思わずふっと笑い出す子……。北京で過ごす子どもたちにとって、図書室は特別な場のように、日本の書籍に触れ、本の中の世界を疑似体験できる宝箱かもしれません。

今回の親子読書は、「1週間継続して読書することで、読書習慣を身につける機会とする」ということをねらいのひとつとして取り組んできました。親子読書をきっかけとして、本のおもしろさに気づき、今後も幅広いジャンルの本にチャレンジしてくれることを願っています。心に栄養をたっぷり与えてほしいと思います。



## 学習部



保護者の皆様にも、子どもたちと一緒に取り組んでいただきありがとうございました。これをきっかけに今後も一緒に読書を楽しんでいただけたらと思います。

# It's a perfect 修学旅行

中学部

これは、修学旅行実行委員会が打ち出してくれた今年のテーマでした。今年の中学部の修学旅行は浙江省の杭州・紹興市への訪問でした。

「上に天国あり、下に蘇州・杭州あり。(上有天堂、下有蘇杭。)」とたたえられた場所で、市中心部の西には世界遺産の西湖という湖があり、中国屈指の風光明媚な景色の中、あいにく、天候には恵まれず、靴をジクジクにして、ずぶ濡れになった日もあり、少々疲れましたが、結果的には、大成功の修学旅行になりました。



中学生たちは、その自然の景色を楽しむことを惜しむかのように、仲間との絆を深めることに夢中でした。全学年シャッフルで「ローテーション」される食卓、毎夜行われる係別会議、こまめに行われる集合・整列・点呼・移動・説明・観光学習、一見「窮屈」に感じるこの単調でストイックな反復行動を、回を重ねるごとに自分のものにしていき、またそれを自分自身で望み・楽しんで行動していった生徒達の行動は素晴らしいものでした。ここまで事前学習で培ってきた力をフル稼働させ

た行動の中には、「やらされ仕事」ではなく、「どうしたら良いか」という、しっかりとした価値観判断があり、各リーダーが自覚をもって積極的に動き、先生のを出来るだけ借りずに、生徒全員で行動・実践できた結果であると思います。

それをマックスで体験できたのは「現地校交流」でした。杭州第十中学校の熱烈な歓迎を受け、現地に着いた北京日本人学校の生徒たちは昂揚していました。しっかりと準備されたプレゼンテーション、そして練習ではちょっぴり苦勞した「桜ノ雨」の大合唱は、聞き慣れた私たち教師の心にも染み渡りような「お返し」でした。短い時間ではありましたが、十分に「燃焼」した後、班別交流ではフェンシングやヒップホップダンスなど、楽しいプログラムも準備されており、本当に「あっ」という間の有意義な交流となりました。



終わってから見れば、この日の「輝き」がこの修学旅行全日程の行動を更にランクアップさせたことに疑う余地はあり

ません。その後は、それまでも増してサラサラとスムーズに成長し続けました。決して「おごる」ことなく、謙虚に「志高く」行われる班別会議・リーダー会議、ガイドさんの案内を十分に学習した観光学習、ホテルでの暮らし、お土産の買い物に行った雨の河坊街での集合時間厳守、本当に何をとってもパーフェクトな修学旅行に仕上がりました。

また、最後の最後には、突然の飛行機のアクシデントがあり、空港に3時間弱「足止め」を食らいましたが、流石にこの大成功の修学旅行の最終ページは、違いました。生徒達の顔は「まだ帰れないの？」ではなく、「修学旅行が伸びた！」という元気な表情でした。待っているご家族の心とはうらはらに、サプライズのプレゼントでも、もらったような「ホッカリ」としたホットな「待ち時間」でした。

その後の土曜参観での報告会でも、保護者の皆様に見守られながら、発揮できた彼らの「大成長」は、修学旅行の大成功を最も具体的な形で表現できたものであると思います。これも保護者の皆様の温かく陰でご支援いただいた成果であると感じております。何かとご心配をおかけし、ご意向に添えない件も多々ございましたが、ご家庭のご支援を抜きにして、この「大成長」は語れません。中学部一同、大変感謝いたしております。本当にありがとうございました。